

美容デッサン制作と学内作品展示の教育的有効性について ～授業「美容デザイン」での考察～

For Educational Effectiveness of Beauty Drawing Production and Campus Exhibitions - Discussion in The Class “Beauty Design”

富田知子¹⁾ 文元麻理香¹⁾ 吉川奈菜子²⁾

抄録

山野美容芸術短期大学美容総合学科美容デザイン専攻の2年前期に配置された演習科目「美容デザイン」は、美容師養成の為に必須カリキュラムである文化論の一教科に含まれる。ヘアスタイル及びメイクの基礎技術を1年間学び、いよいよ美容のデザイン力を身につけることが求められる学年である。その2年の前期に行われる本授業の内容は、美容デッサン及びコラージュ技法を中心に用い、ヘアスタイル、メイクを観察する力をつけ、デザインがいかにか人の顔の印象に関わるかを学ぶ。本稿では平成26年度から導入した、受講者の全員を対象として授業の課題として作品を制作し、学内コンテストを行って作品を展示した新たな教育実践を振り返り、その授業内容及び授業構成について考察する。

キーワード：美容デッサン 観察力 アレンジ力 コラージュ 美容デッサンコンテスト

I. 緒論

「美容デッサン」とは本稿では、ヘアスタイルとメイクアップを主題とするデッサンを指す。この美容デッサンは一般的なデッサンとは違い人物の頭部を主体とし、説明的な表現ともとれるほど髪顔全てにおいて明確に描き込まれている。顔の印象とヘアスタイルは深くかかわっている¹⁾。しかしながら、先行研究²⁾で示したように、美容師といまだ経験の浅い美容学生との間には、ヘアスタイルのデザインイメージを決定する要（パートの位置やボリュームをもたせる位置等）に注目する能力に明らかに差があることも分かった。経験の浅い学生に対し、ヘアスタイルの構造に注目させる為には、まず平面的な絵の上での確認は有効だと考える。平面であるため、顔の様々なパーツとの関係性を比較しやすいからである。平面上では美容技術の確立していない学生でも、工夫次第ではデザインのバリエーションによる印象変化をも表現し確認できるという利点も考えられる。このような効果を踏まえ、「美容デッサン」の科目を履修して制作された作品群を学内コンテスト形式で展示することを学生に事前に告知し授業を進めた。学内コンテストは26年度が5回目

であるが、受講生の全員が参加するのはこれが初めてである。全員の参加を義務づけたことについて、コンテストの後に学生全員にアンケートを行い、感想や意見を求めた。

II. 「美容デッサン」の授業の過程

この科目ではまず、ヘアスタイルを作る造形要素である線やボリューム等から作られるイメージについて講師の説明を聴き学ぶことから始める。直線、斜線、曲線、その強弱、幅や長さから生まれるイメージを毛髪に置き換え、実際のスタイルで探してみる。次に面から生まれるボリューム感やシルエットなど、その形状から生まれるイメージについて講義した。顔の形についても単純化した輪郭をとらえ、その特徴を知る。一般的に使われる丸顔、面長、逆三角、ベース型等がその例である。単純な形に分類することで、それぞれに必要なデザインの要点を理解しやすくなる。

これらの講義により、頭部の形状や特徴等に着目できるようになったところで、デッサンを始める。

III. デッサン作品

デッサンが不得意だと考える学生は決して少なくない。「美容デッサン」は必修科目である。そうしたデッサンを苦手とする学生にも必修科目としてデッサンを講じる必要性はどのようなものだろうか。

1) Tomoko TOMITA Marika FUMIMOTO

山野美容芸術短期大学

連絡先: 〒192-0396 東京都八王子市鎌水 530

2) Nanako YOSHIKAWA 山野美容芸術短期大学非常勤講師

それは美容技術が生み出すデザインの観察力、そして目からの情報を理解し、整理し、手に伝える力をつけることである。また描こうとするヘアスタイルのイメージの要因、モデルの顔の特徴をとらえる、などが、考えられる。不得意と考える学生にも、苦手意識を持たずに取り組める方法を探りつつ、以下の方法で授業を進めた。

- ① デッサンを行うことの意義の説明
- ② デッサンの鉛筆の使用方法
- ③ 目、鼻、口、毛髪等の部分ごとの描き方
- ④ 標準的な顔の描き方
- ⑤ 顔とヘアスタイルの関係を見つける為の演習
- ⑥ B5サイズデッサン
- ⑦ B5サイズヘアスタイルアレンジデッサン（カラーージュ）
- ⑧ B4サイズもしくは B3サイズデッサン：⑧については、山野美容芸術短期大学図書館で自分の描きたいヘアスタイルの写真を選んでデッサンを描いた。この作品をコンテスト対象とした。

IV. 学内コンテストへの参加

5回の授業で、作品を完成させる。①から⑦は制作手順で有るが、それぞれの段階において

- ① 選んだ写真のおおよその輪郭トレース：輪郭をなぞることで、形の確認が出来ると共に苦手意識を持つ学生にはバランスの崩れを防止し、安心感を与えることができる。
- ② モノトーンが色をつけたものにするかを選択：双方に利点があると考え。モノトーンは色に惑わされない明暗と立体感をすることができる、カラーでの作業は、手持ちの画材での混色での色制作を行うことで、色の成り立ちを考えながらの作業となる。
- ③ 背景の取り扱いを決める：見本となる写真の背景にこだわらず、背景の取り扱いによって作品のイメージを変化させることで、空間を意識させ、ヘアスタイルの毛先にも注意を払い、全体のイメージを認識しながら作業を進められる。

④ 細部の描き込み：通常のアート作品との違いは、ヘアメイク画である為、スタイルやメイクが明確であることが必要である。そのため、細部のディテールまで描くことになる。根気のいる作業となり、技法を教える、担当教員が一部を描いてみせることで対処していく。

⑤ 展示及びプレゼンテーション：各自廊下壁展示スペースに展示。客観的に自分の作品を見る。各クラス、各自自分の絵の前で、絵について苦勞した点、努力した点等コメントをする。

⑥ 他の作品への評価：全クラスの作品を見て、良いと思った作品を選び、その作品についてはなぜ良いと思うかをコメントする。自分の作品の過程を見直す機会ともいえる。

V. 学生に対するアンケートの結果

今回初めて受講学生の全員の授業作品を展示した(図1、図2)。このことについて、学生の感想や要望を尋ね、授業を振り返る為アンケートをおこなった。



図1. B4サイズ展示風景



図2. B5サイズ展示風景

アンケートの質問項目と学生の回答は以下のとおりである。

① 教材は制作の役にたったか。(図3)

80%が役にたったと回答したが、20%の学生がそれ以外となっている。

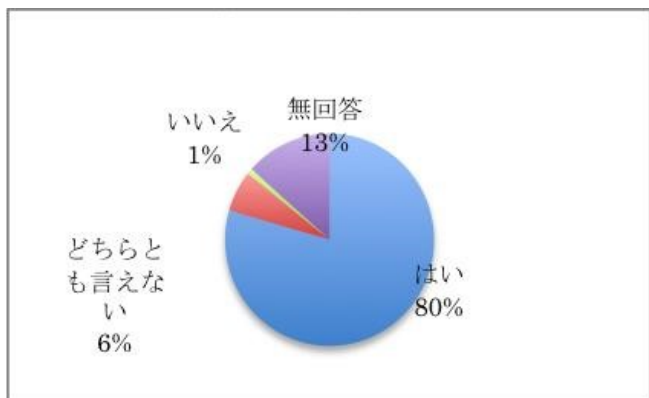


図3. 教材は製作の役に立ったか

② 制作する作品のサイズ (図4)

B5は25%、B4は52%となった。

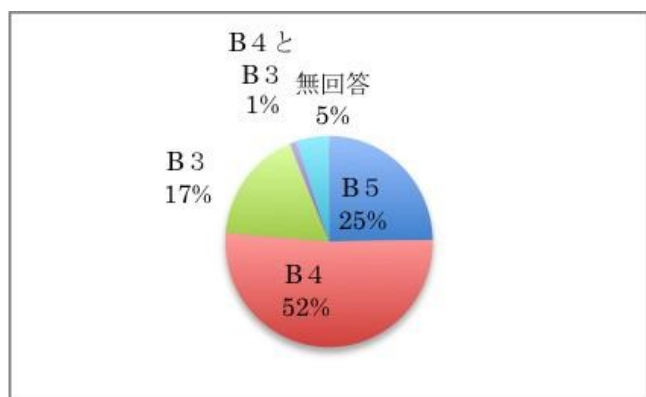


図4. 作品のサイズ

③ 全員展示はやってよかったか (図5)

「良かった」は71%「どちらとも言えない」15%「いいえ」1%となった。

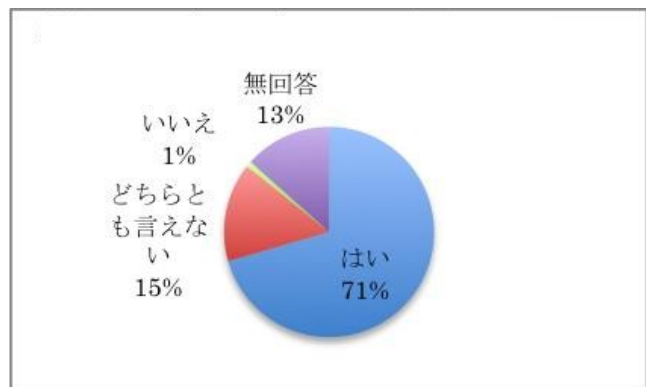


図5. 全員展示はやって良かったと思うか

VI. 考察

アンケートの結果を踏まえ、設問①教材については、一度使用した教材を再度次のデッサン時にも見直すなど再度活用し更なる効果的な使用方法を見直したい。設問②作品サイズについては、時間配分を検討し直し、B5の作品についても、B4の為の導入デッサンという意味付けでは無く、充実した作品となるよう努力の必要があると考える。設問③全員展示については、肯定的な回答を多く得たが全員ではないことを考えると、学生に対する展示の意味を個々に検討し理解をした上で展示が出来るよう改善をしていきたい。

以上の結果を総合的に判断し、美容技術の向上に直接的に関係を見いだす事の難しいデッサン教育であるが、効果を得られると考えられる美容デザインの観察力、発想力、構成力を身につけるための一助となるよう検討を重ねて行きたい。

謝辞

学内コンテストにあたり、お忙しい中多くの先生方に採点のご協力頂き感謝申し上げます。

文献

- 1) 武藤祐子・富田知子・鎌田正純：髪の毛の分け目が顔印象と美容師の視線パターンに及ぼす影響-評価用紙法と視線解析法の比較-, 日本顔学会誌十四巻一号, p.67, 2014